

---

# 思い出に未来を求めて

智恵子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思い出に未来を求めて

### 【Nコード】

N2091D

### 【作者名】

智恵子

### 【あらすじ】

人とは多くの思い出や、責任、後悔を抱きながら生きています。年を追うごとにそれらは重くなり、人は身動きがとれなくなってしまう。忘れられない好きだった人がいると思います。そんな思い出が強く残る人・・・のお話です。

今日も、まだ寒い日が続いております。

何故か、今日もまだ生きております。いつ死ぬかなんてわかりません。

私は死という最高の瞬間の為に生きています。

しかし、今日はまだ生きております。

人とは多くの思い出や、責任、後悔を抱きながら生きています。年を追うごとにそれらは重くなり、人は身動きがとれなくなってしまう。

苦しい時が、人生のどれ程を占めているでしょう。不平不満を述べている時、寂しいと思う時、いずれ別れるために出会い、別れの時に嘆く。

人は何故生きているのでしょうか。

何故、苦しみの中で生きるのでしょうか。

死に向かつて、苦しい中を何故進むのでしょうか。

しかし、人は生きるのをやめません。結局、死という現実に向かつて歩むのです。

いいえ。死のために生きていると人

は思いたくない。

だから人は夢を追ひ、欲望を持ち、そして愛を求めて生きているのでしょうか。それらが、苦しみを与えているとは知らずに…。

さて、私はいつの日か訪れる死のために、生きている証として、人間の愚かで悲しい物語でも始めましょうか。

凍てつく冬の終わりを告げる頃、晴れわたる空の下で、結婚式を挙げる男女がありました。

薄い雲が遠くにありて、ふとした瞬間に風が吹き抜ける様な午後でございます。

平和なときの流れに感謝しつつ、めでたく式は挙げられました。だからといって、この男女がいつまでもめでたく、そして平和であるとは限りません。

人生とは、ドラマであり、平凡であり、喜劇と悲劇なのですから。結婚したら幸せになれると思うのは、今までがとても幸せに生きてこられた方でしょう。

今からお話する物語は、余りにも青春という名の過去に執着した、女の話でございます。

不思議な女がいました。

容姿は並以上、家柄は中流。そう、この世の中で一番多いと思われる女の類。

けれど、不思議な女なのです。

じつは女なんて、心の中はみんな不思議です。

「一番好きな人と結婚すると不幸になる」

「初恋の人と結婚するのは幸せだ」

いろんなことを言っている女達ですが、結婚はするのです。たぶん一番好きな人と…。

または、一番理解してくれる人と…。

しかし、この不思議な女は先ほどの言葉を、全て満たしたいのです。かなり矛盾していることに気付いていないのでしょうか？

初恋の人と結婚するということは、その相手は一番好きな人であると、普通なら考えられます。

さて、この女は大きな矛盾を抱えて、幸せになれるのでしょうか。

「沢村京子も、明日には中島京子になるのか…」

私は気が付くと、ただ一人で夕日の見える公園で独り言を呟いていた。

季節は春であるが、夕刻では冷たい風が私の肌に突き刺さるようだった。

明日に結婚を控えた私は、寒空の下、家に帰るつもりだった筈なのに…。

なぜか、寒いと感じながらも、公園のブランコに乗り、軽く揺れていた。肩まで伸びたまっすぐな髪が、揺れと共に動いている。冷たい空気にさらされた髪が、私の肌にあたりひんやりした感覚をもたらした。

揺れることに、キィキィと泣くブランコが、なぜだか心にしみこんでくる。

そしてブランコの揺れが、だんだん心の揺れに感じてきて、私はブランコの揺れを止めた。

結婚を前にして、どんな不安になつてゆく。誰でも結婚すると、家事、出産、育児が付いてくる。そして亭主が浮気したり、案外マザコンだったりするのだ。

そして、明日結婚する男が、私の一生を左右する。血のつながりもない男と生活し、そして家族として生きて行くのだ。

本当に、本当に良いのだろうか…。私は、あの人を一生愛せるだろうか…。

きつと一生、愛していなければ苦痛の毎日が待っているだろう。

愛のない家族生活を送ることが出来るほど、私は強くない。

私は、私を育ててくれた母のように、優しくなれるだろうか。明日結婚する男が、家族を守ってくれるのだろうか。

そして、一生愛し合えるのだろうか…。

幸せになれるのだろうか…。

際限なく湧き出る泉のように、不安は私の心に音もなく膨れ上がる。

どうして、こんなにも不安が湧き出てくるのか…理由はわかって

いる。

そう、あの人の存在。

初めての、そして激しい、命をも懸けてしまいそうな、片思い。青春という名の輝いた時を駆け抜けた、私の魂。

あの人のために私は存在していると、心から信じていた。

あの人に出会うために、私は生まれてきたと思った。

激しく、自分自身を見失うほどの熱い思い。

自分自身を壊してしまいそうなほどのときめき。

そんな恋を知ってしまった私は、あの人のことを忘れただろうか？明日の結婚相手の方が好きだろうか。

そう自分に問いただしてみても、答えは見えなかった。

だが、なぜだろう。あの人を思い浮かべるだけで、鼓動が激しくなる。大人になった穏やかな心が、荒れ狂う。

忘れよう、忘れようと思っただけでも、あの人のことが忘れられない。忘れてしまう自分が嫌で、忘れられない勇気のなさを恥ずかしく思う。

けれど、あの人のことを考えると、そんな事はどうでもよくなり、ただ懐かしさよりも会いたくて、思い出よりも心が熱くなる。

何度も憧れと、自分に言い聞かせても、この思いは変わることはなかった。いつまでも穏やかな感情に変わることなく、熱い熱いときめきが、この胸から離れることはなかった。

今、明日の結婚を決意しても、あの人への思いは消えることはない。いや、さらに激しく燃え上がってゆく…。

「駄目だ…。こんなことじゃ、これから先やってゆけない。心を切り替えなきゃ…。あの人は私のことを、決して見てはくれないのだから」

そう、片思いで終わった恋を、綺麗な思い出にかえなくては…。けれど、涙の思い出しかないのに…。どうすれば…。

どうすれば、綺麗な思い出になるの？。

どうすれば、幸せになれるの？こんなに幸せを求めているのに

…。

「おい京子、何しているんだ」

「克巳…」

赤い空の下で、公園のブランコに乗っている私の目の前に、明日の結婚相手である克巳が突然現れた。

「なんで…こんなところに？」

「なんでって…お前に会いに来たんだろう。それなのにお前の家に行く途中に、こんな所にいたからさ、どうしたのかと思って、声をかけたんだ」

「そう…」

夕日が背の高い克巳の影を、さらに大きくして私の目の前に表していた。

彼はモデルのような体型で、少し高飛車なところがある。それは学生時代から変わることはなかった。

中学の頃から、喧嘩の毎日を送った彼は、自由で自分の意志を強く持っていた。

世に言う不良という奴だった。だから、世間的には頼りにはならないかもしれないが、それなりに優しく、それなりに暖かい。もう、一〇年来のつきあいだから、激しさなんてあるはずもない。ただ、穏やかで安心できる。

しかし、私はそんな彼をだまし続けている。

彼は私の淡い初恋の人だった。けれど、彼は私の心の中では、二番目の男性なのだ。

彼は、私が彼のことを一筋に一〇年もの間、一番好きだと思っているだろう。

男と女としてつき合いだしたのは、まだ二年足らずだが、友達の…いや、知り合いの期間が長かった。その間に、私は青春の全てを掛けて愛する人に出会ったことを、彼には言っていない。

「どうしたんだ、京子？マリッジブルーってやつか？」

そっというのは遠い昔にすんでいる。マリッジブルーより、もっと

悪質な悩みだと、私自身は思っている。

克巳のことが一番好きではない。

そんなことは口が裂けても言えなかった。

やはり私は、嘘つきな答えを言った。

「そうね、マリッジブルーってやつかな」

「お前が…マリッジブルーね…やっぱ女だったんだねえ」

「失礼ね、明日の新婦様に向かって…もう」

私はブランコを降りて、克巳を小突きに向かった。

私の振り上げた手を、克巳の力強い手で捕まれ、そして彼からの優しい包容。

これから、ずっとこうして生きて行くのだ。

この人の、暖かい胸の中で、こうして身を任せて生きて行くのだ。それでいい。あの人のことを好きになれば、悲しみと寂しさの中で狂いそうになりながら、涙を流すことになる。だから、これでもいいのだ。二番目に好きな人と結婚するのが、幸せなんだ。

もう孤独の中で愛する苦しみから逃げ出すのだ。

それが、そこからが…私の幸せなんだ…。

克巳の腕の中で、強く強く、自分自身に言いかけた。

そして、一夜明けると、結婚式の当日だった。

昨日の私の気持ちとは正反対の青空。晴れわたる雲一つない高い空。

結婚式が始まる。

きれいな白無垢に身を包んだ私がいる。

白粉を塗り、紅を差して花嫁になる。美容師たちが誉めたて、私をその気にさせようとしている。

そして親戚一同が集まる。友達が披露宴に出席してくれる。司会者が挨拶に来る。

もう…後戻りは出来ない。

衣装の重みが、私の心をさらに沈ませる。苦しい。心が苦しい。

きつと、他の人は緊張していると見ているのだろう。

いや、そうなのかもしれない…？

極度の緊張から、こんな気持ちになっているのだろうか。

不思議だった。自分が結婚するということが、ひどく不思議に感じられた。

「京子…。綺麗ねえ」

私に声を掛けたのは母だった。

私を生んで、私の幸せを一番考えてくれる母。

母の姿を見て、私の中で少し不安というものが無くなっただろうか。

けれど、何故だか責任という言葉が頭に浮かんだ。

幸せにならなければならぬ責任。

「母さん…」

なんだか、嬉しそうな母の顔を見ると、幸せになれるような気がした。長い年月を、わがままな父の世話と、私を育ててくれた母。幼い頃、疲れた手から、幸せをわけてくれた優しい母。時には厳しくもあつたけれど、今となっては、それが思い出という宝物になっている。

「ごめんねえ、京子。あんたの幸せをずっと考えて生きてきたつもりだったけど、苦労させたよね…きつと…」

不安がつてちゃいけない。幸せにならなくちゃ…。

「そんな…母さん…私、母さんのようになるんだから…母さんが謝つたりしては、だめよ…」

涙ぐむ母さんの姿。

「母さん、何も泣くことなんかないわ。遠く離れるわけじゃなく、ずっと側にいるのに…母さんの側にいるから」

離れるわけでもないのに、私もなぜか涙が溢れそうになる。

違う家庭を持つということが、これほど離れてしまう…という感覚を持つとは思ひもなかった。

違う家庭…克巳との家庭を持つ私…不安を呼び覚まされた私は、

強く瞳を閉じた。

これから、式を挙げて披露宴を無事に済まし、幸せになる。これからのよ…。

「京子！」

「いいなあ、京子。この幸福者！」

「香奈！真紀ちゃん！」

母との会話の中、突然友人に話しかけられた私は、驚いた。

「いいなあ、あー私も早くしたい」

香奈も真紀ちゃんも普通の女の子。同じ二二歳の同級生。

何故、早く結婚したいのだろう。

そんな疑問を感じながら、私は挨拶を交わしていた。

そう、私は結構早くして結婚すると思う。克巳も二四歳になったばかり。なぜこんなに早く結婚するのだろうか。

仕事も順調で、夢も希望もあるのに、なぜ、こんなに早く…。

本当はこれも理由はわかってる。認めたくないだけだ。

不安だからという理由。

また、悲しい恋に戻らないために、逃げるように結婚するのだ。

どうか、もう悲しみが私を訪れませんかように…。

どうか幸せになれますように…。

雪枝…

あなたが生きていたら、香奈ちゃん達のように私を羨ましがるのが  
だろうか…

きっと、あなたがいたら私は逃げていなかっただろう…。

一六歳で時を止めてしまった、雪枝…

「一度振られたら怖いものなんか無い！どんどん告白できるよう  
になったじゃない」

「私は京子みたいに人を好きになったことがないから、私の分  
ま  
で、いっぱい恋をして、いっぱい好きになって、そして幸せになっ  
てね」

そう言ってくれた彼女のことを思い出した。

高校に入つて、二人の強い人に出会つた。

私の心を全て奪つていった、人を惹きつける瞳と意志の持ったあの人。

そして、雪枝…。

高校に入学したとき、女の子達は不安のために、見知らぬクラスメイトと友達になる。そして群をつくり安心する。けれど、あなたは違った。ただ席に座り、黙って前を向いて堅く口を閉ざしていた。近寄りがたい雰囲気と、強さを秘めていた。

その雪枝がいつの頃だろうか…みんなから好かれ、頼りにされていたのは…。

話しかけると、初めは獣のように警戒する雪枝。見た目も社会に反発するかのように、際だつて不良…という言葉を連想させる姿だった。

しかし、いったん心を許すと、暖かく純粋な心の持ち主だった。

自分に正直に生きる彼女の姿に、彼女を知る者は憧れた。

今思えば、果てしなく愛に飢えていた少女だったのだ。だから、あれほど優しく、強く、潔 かつたのだ。

失う愛もなかった。守る愛もなかった。

無条件に愛を与えてくれる両親は堅気ではなく、家には母親の事を姉さんと呼ぶ他人が出入りする。家庭環境のために、友達は極限られた同じ境遇の者しかいなかった。

高校に入り、彼女は変わったのだ。彼女の家庭環境を知る者もなく、過去を知る者もないのだから。

彼女の新しい人生の始まりだったのだと思う。

彼女は、優しくかった。だから、みんなが彼女を愛すると共に、甘え、頼つた。

彼女の過去を、境遇を知らないから…強い彼女に頼りきりだった。そう、私もその一人だった。

悩みを打ち明け、相談にのってもらう…。雪枝から、相談されることはなかった。私がいつも相談していたから…片思い、失恋を嘆

いていたから…。

けれど、あなたが言ってくれたから、あなたが頑張れって言ったから、だから…だから、あんなにもあの人を愛せた。

でも、あなたは私をおいて逝ってしまった。

私に何一つ相談することなく、強く言い切ることしか知らないかのように、彼女はいつも決断したことこの報告をしてくれた。

私が、雪枝の苦しみ、悲しみ、怒りをもっと考えていたら、あなたは死ぬことは無かったかも知れない。

それから私はあなたの分まで幸せにならなきゃ…そう思った。

でも、寂しかった…。だから…だから私は克巳を選んだの。

もう、私は一六歳の私じゃない。どんどん世間が私を大人として見る。なんだか、結婚しなくちゃ…そう思った。結婚したら幸せになれる、そう思った。このまま、あの人を好きでいたら…きつと不幸になる…。

雪枝…。今、あなたがいてくれたら…こんなに不安じゃなかっただろう。こんな気持ちの私を叱ってくれただろう。

自由なあなたに憧れていたよ。好きな人に縛られるわけでもなく、ましてや校則とか、人間関係に縛られない。

あなたに憧れていたのに…私を励ましてくれる、強くて優しい瞳のあなたが大好きだったのに…。

枝毛は女の勲章！なんて言っつて、ワンレンにパーマをあてたとき言っつたね。

人目なんて気にしないあなたが好きだった。

私にそんな強さがあつたなら、きつと世間に負けなかっただろう。大人になったら結婚する…なんて思わなかっただろう。

幸せは自分の中にあると思えただろう。

でも、私にはそんな強さもない。

克巳に幸せにしてみよう…これが今の私。

どうか、克巳が幸せにしてくれますように。どうか、幸せなれますように…。

私は祈るような気持ちで結婚した。

こうして、結婚した日が、懐かしくも昨日のようにも思うようになった。

春の日が穏やかな午後をつける、土曜日。

私は会社も休みで、家事いつさいを終えて、リビングでくつろいでいた。克巳は休日出勤をしているため、いつも土曜は、私一人だった。

結婚して、くつろぎを感じるのは、この土曜日だけだった。平日は会社勤めで疲れる上に、家事までこなさなければならぬ。

克巳は家事など、何もできない男だから、私が一人でしている。ひどく疲れるが、克巳に手伝ってとは言えなかった。

なぜ、言えないのか…。それは、私に負い目があるからだろう。

彼は、私を一番愛してくれる。でも、私は彼が一番ではない。心の奥底で、激しい思いを必死にこらえている。

結婚して、もう二年がたつのに忘れられない。…あの人のこと。

土曜日には、必ずと言っていいほど思い出す。涙しかなかった恋のことを。

「会いたい…」

一人きりのリビングで、クッションを抱きしめながら、呟いた。

この一言が、私の心を掻き立て、思いも寄らぬ行動へと私を導き出したのだ。

「会いに行こう！せめて、姿さえ見れたら、少しはこの思いから…抜け出せるかもしれない…今なら、まだ間に合う」

時計を見ると、一時を少し回ったところだった。克巳が帰ってくるのは、今日は一〇時。あの人の家の近くまでは、約一時間半。今では、勤め先も、生活自体も何も知らないから、家の前で待ち伏せするしかない。

私は、急いで化粧をはじめ、洋服を選び、靴を履いた。

バスにのる。心が騒ぐ。鼓動が激しく私を打ち、頭の芯がじんじ

んする。

自分で何をしているのだろうと思う。結婚しているのに…なんて思っても、激しく燃えはじめた心を消すことは出来なかった。

地下鉄に乗り継ぎ、あの人の住む町に近づく。逢えるかどうかも分からない。

だから、こんなにも勇気が出るのだろう。逢えると分かっていたら、途中で怖くなって逃げ出してるに決まってる。逢っても、何も話せない自分を知っているから。極度の緊張のあまり、泣き出してしまふことを知っているから。

遠くから見つめるだけでいい。話なんか、どうせ出来ないもの。夢の中でしか話せないもの…。

駅について、電車を降りる。でも、ばったり逢ったらどうしよう。近づくにつれ、期待と不安が、正直に私の心を揺さぶる。

ただ、あの人を知りたいの。今、何を考えているのか、何をしているのか、そして、あの人の夢は叶っているのか…。

あの人の夢が叶えばいいのに…。

秋の冷たい空気の中を激しく戦い、散ってしまった夢…。夕日があの人立つグラウンドを照らしたあの日。永遠とも思える時間、ホイッスルと歓声が鳴り響き、立ち尽くしたあの瞬間。

あの日思い出しながら駅を出て、私は歩き出した。一步、一步を踏みしめて、坂道を上がる。この坂道から降りてきたらどうしよう…。

でも、もう学生じゃないから、車かな…。車から、私を見つけたら？声をかけてくれるだろうか？

いいえ、何を期待しているの？逢って困るのは、私なのに…。もう、好きと言える権利もないのに…。人を傷つけるだけなのに…。

み…えた。あの人の…家だ。

ここで、よく待ち伏せをした。ただ、あの人の姿を見たくて…。部活の帰りに、途中から追いかけて、坂道を一気に駆け上がり、あの人の帰りを待った。

たまに、帰らないこともあったりして…。その時は、きっとバイトかなあ、彼女かなあ、なんて思いながら、とぼとぼと坂道をおりはじめる…。愛しい人に会わないように…密かに坂道を下る。

そして、家に帰って夜中に泣いてるの…。

帰るのを見たときは、見たことが嬉しくて、見えなかったときは、見えないことが悲しくて…。

思い出に浸りながら、私は待っていた。

高校時代の一つ年上の先輩。ラグビー部の主将だったあの人。とても強くて、自信に満ちあふれていて、それでいて、どこかふざけたところがあるの。軟派に見えて硬派で、冷たく見えて優しく…。きつい眼差しと、涼しげな口元。決してかっこいいと言っわけではないけれど、人を惹きつける雰囲気。

大好きだった。何もかも。嫌なところも、素敵なところも…。

「もしかして、沢村さん？」

低い、響く声が私の後ろから聞こえた。

落ちついてた鼓動が、再び激しく鳴り響き出す。呼吸が苦しくなる。足が、すくみ上がる。

なぜなら、その声は…。

「宮下先輩…」

それ以外、驚愕に震えて声が出なかった。涙が溢れ出しそうなのを必死にこらえる。幾夜も夢見た人。ずっと会いたかった人。

その全く変わりのない姿に、少し驚いた。そして、月日がさかのぼった様な感覚を私は覚えた。

「どうしたの…こんなところで」

先輩の問いに、声が出なかった。

ただ、愛しくて、懐かしくて、思い出が溢れ出す。私のことを覚えていてくれたことが、嬉しくて、声を掛けてくれたことが、苦しくて…。

何か話さなくちゃいけない、きっと変に思っている。でも、なんて言えばいい？もう六年も会っていない人と…なんて話せば…。

「沢村さんだよね？」

「はっはい。お久しぶりです！」

なんて、間抜けな言葉を言ってしまったのだろう。この時をどんな気持ちで待っていたか…。絶望的な望みを、どんなに強く思っていたか……。

「何してるの？こんなところで…」

昔、この場所で、宮下先輩にクリスマスプレゼントを渡したことがある。冬の寒空のしたで、三時間ほど待っていた。やっと渡せたのは、通いはじめて、三日後の事だった。

今日は何も持っていない…。

なんと言えば良いのだろう…。

「あ、あの…友達の家が近くにあって…」

「ふーん、そうなんだ」

私のことなど関心がないように、家の方向を見て、宮下先輩は軽い挨拶と共に立ち去ろうとした。

「あつ…待って下さい…」

宮下先輩は、突然呼びかけた私を不振そうに見た。

「嘘なんです。友達の家に来たんじゃないんです」

自分で何を言っているのか、わからなかった。ただ、気持ちと声が、私の意志とは関係なく動き出していた。

少し頭を傾げるような素振りを私に見せた。そのそぶりが、昔、クリスマスプレゼントを渡した時と同じ様なしぐさだった。声が、気持ち、頭の中で考える前に、つい言葉にしてしまう。

「私…あなたに…宮下先輩に会いに来たんです」

驚いている。私も、宮下先輩も…。きっと、声も出ないほど驚いているだろう…。私がそうだったから…。出てしまった言葉に、戸惑い、驚き、混乱していたから…。

何を言ってしまったのだろう…私は…。

言う資格すらないのに…。悲しい思いをするだけなのに…。

だが、何もなかったように宮下先輩は答えた。そう、いつものよ

うに、なんの思いもなく、端然とした態度を崩すことなく、答えた。

「なんで？」

突然の返事に私は、更に戸惑った。

しかし、平然と答えてくれるのが、私に嬉しかった。そう、もう結婚してしまった私には、それが嬉しかったのだ。

期待を感じさせない先輩の口調が、私の心を落ちつかせた。

再会したのは、春の少しひんやりした空気の中。太陽が沈もうとする夕暮れ時。

激しい鼓動と、苦しいほどの熱い思いを体内に駆けめぐらし、私は愛する人と再会した。

再会しなければよかった。

少しの後悔と大きな喜びが、私の心を揺らした。

もう、気持ちは後戻りできないだろう。出会ってしまったら、それ以上を望んでしまうだろう。そして、涙で眠れぬ夜が続くのだろうか…。

「話ってなに？」

言ってしまった言葉に驚き戸惑っていた私は、つい話があると言ってしまったのだ。

そして、いま私達は、静かな茶店のテーブルを挟んでお茶を飲んでいた。

大きな窓ガラスの側にあるテーブル。室内を遮るように置かれた観葉植物。

ガラスの向こう側を通り過ぎる人は、異世界の人ように感じた。

二人だけの空間…。

激しい鼓動と共に時は過ぎる。大切な先輩との二人きりの時間が、静かに流れる。

何かはなさなくてはいけない…話さなければ、この世界が消えてしまう。

ああ、この時が永遠に続けばいいのに…。

「は…話ですよね…」

何を話せばいいだろう。心が焦った。

この目の前にいる人を、どんなに夢に見ただろう。

しかし、そんな私の気持ちを、知らない。きっと知らない。

眠れない夜があることも、離れていることが、悲しくて寂しくて、この世界に生きている意味さえないような孤独のなかで、泣いていることも知らない。

どうか、私のこの激しい恋心を知って欲しい。何も望まない。ただ、この心の熱さを知って欲しい。

そうでない、あまりにもこの恋心が寂しすぎるから…。

私は、祈るように震える声を一言発した。

「好きだったんです」

ありったけの勇気を振り絞って私は言った。

この言葉が言えなくて、いつも回りくどい言い方になっていた。

プレゼントを渡したり、バレンタインにチョコレートを渡したり

…今考えると、おままごとみたい…。

でも、気持ちちは真剣だった。

今と変わらずに好きだった。ただ、気持ちばかりが溢れて言えなかった。

好きという言葉…。

今、やっと言えた…。

「うん、知ってる」

しかし、先輩の返事は淡々としていた。どれ程、勇気を出していたか、先輩はわかっていない。やっぱり、この人には伝わらない。ああ、やっぱりという、諦めと共に不思議な安堵感が私の中に存在していた。

昔の私には考えられない姿と心だった。

先輩を目の前にしては、何も言えなくて、ただ涙が溢れるばかりだった。心が震えて、伝わらないことが、もどかしくて…。

私はこの時、大人になったんだと感じた。

「今はどうしているのですか？」

「なにが？」

「仕事とか・・・ラグビーはもうやめたのですか？」

先輩は、少しの沈黙の後に、ガラスの向こうにある町並みを見つ

めた。

「まあ、ラグビーなんて部活だったし」

それは嘘。すぐわかってしまうような嘘。

あんなに好きだったのに…。卒業して、どんなに仕事が忙しくても、暇を見つけてラグビー部を見に来てくれた。どんなに時間をさいても、どんなに練習がきつくても、笑って練習に通ってた。

一番はじめの就職先を辞めたのも、ラグビーのため。三交代制の仕事では、ラグビーの練習が出来ないと言って辞めた噂は、私でも知っている。

ラグビーをしていた頃の輝いていた瞳を、知ってるのだから…すぐ嘘だとわかるのだから…。

だから、そんな疲れた瞳をしないで…。輝いていた頃を思い出して欲しい。

「そんな…あんなにラグビーが好きだったじゃないですか…」

「好きただけじゃ…やっていけないこともある…」

先輩は遠くを見つめていた。

あの時を思い出すかのように…遠い瞳。

高校時代最後の試合…。この試合で勝てば、全国でベスト4になり、実業団からのスカウトの話が本決まりになるはずだった。

前半立ち上がりの悪いチームだったが、後半の追い上げで先輩のトライが決まり、一点差になった。勝てると思った。時間も迫り先輩のキックが決まれば…。

最後の審判のホイッスルが聞こえたとき、ボールはゴールを反れていた。

この試合で、スカウトの話は相手チームの選手に決まった。それでも、先輩は実業団への夢を諦めていなかったのに…。

「もう、諦めてしまったのですか？」

先輩は答えなかった。

「君は？結婚したんだって？なんか噂で聞いたけど」  
知っていたんだ…。

妙な安堵感が再び蘇る。

高校の頃、ラグビー部マネージャーとして、生徒会長として、私  
は何かと有名人だったから、耳に入っただろう。

ラグビー部のために、そして宮下先輩のために生徒会に入って予  
算を上げて…。

全てが、輝いていた先輩のため。輝いている先輩がいた青春時代  
は、私の自慢だった。

先輩に結婚のことを言われると、全てがなくなってしまふような  
気がした。今までの私の心が全てなかったような気がした。

でも、これが現実。知っていた方が良かったのだ。私が馬鹿な行  
動に走り出さないためには、結婚していることを知られている方が  
いいのだ。

「ええ、結婚はしました。二番目に好きな人と…。その方が幸せ  
になれるって言うでしょう。だから先輩を諦めたんです」

長い沈黙。

私が長く感じたただけなのだろうか、何事もなかったように先輩は  
話しました。

「俺なんかは、やめて正解だね。軟派でわがままで、定職もつか  
ないでフラフラしてるし…」

苦笑する先輩を見た。

けれど、そんな先輩を気にしなかった。

「でも、好きでした」

私は、強く言い切った。

もう、望みがないから、だから自信を持って告白することが出来  
た。

断られるという不安がないから、思い切って言うことが出来た。

「なんか、変わったね。今では君の方が大人みたいだな」

違う、もう望みがないから。だから…、だから言えただけ。

心は今でも、何も変わってない。

今でも、あの頃に帰りたいと思ってる。先輩だけを見つめていた、

苦しくて、寂しくて……けれども、輝いていたあの時に、帰りたいと思ってる。

「……そんなことないです」

再び訪れた沈黙は、長かった。

先輩は、もう日が落ちて、ネオンが光る街を眺めていた。

そして私は、遠い目をした先輩の横顔を見つめていた。

ガラスの向こう側に何を求めているのだろうか？輝いていた瞳は、何を求めているのだろうか？

意志の強い瞳は変わらない。でも、その強い意志が、心が、どこに向ければいいか判らないような……そんな瞳のような気がした。

「話がそれだけなら、もう帰るよ」

行かないで、そう叫びたかった。

でも、この空間に、この沈黙に耐えきれないように去ろうとする彼には、言えなかった。

「また、また逢ってください」

勇気を出して言った言葉は、その一言だった。

「別にいいよ、電話してきて」

少しの戸惑いの後、軽い口調で私に言い残し、茶店を出ていった。私はたまらない幸福感で、心が満たされた。

別に社交辞令であることは、悲しいほど知っている。

けれど、また逢える事が嬉しくて……。嬉しく思っではいけない事もわかってる。

しかし、気持ちは抑えきれないほど膨らんで、輝き始めてしまったのだ。

不倫とか、浮気じゃない。まして、浮ついた気持ちでなんかじゃない。

克巳のことも、愛している。二年間も共に暮らしてきたのだから……。初恋の人だもの。淡い思いを寄せていた克巳だもの。確かに愛していると思う。

でも、この気持ちは抑えられない。ただ、愛しくて。見返りとか、

暖かさとか、全く関係なくて…。ただ、好きなだけ。逢いたいだけ。そして、知りたいだけ…。

克巳のことは全てわかっているから、安心できて、気を使わなくてもいい。

でも、どんなに悲しくても、どんなに傷ついても、あの人が好き。一人残されたテーブルで、悲しいような、嬉しいような感情が心を支配していた。

この場所から離れると、逢っていたことが夢の様な気がするのが怖くて、離れられなくなっていた。

そう、ここを離れると、克巳の奥さんという現実が待っている。

夢…。先輩とのことは夢なのかもしれない。

いいえ、先ほどまで、この場所で、確かに会っていたのだ…。この目の前の席で、窓の外を見つめていた。夢じゃない…。

何度も考えたが、夢と現実の狭間で収拾のつかなくなってきた気持ちを抱え、私は克巳の元へ帰ろうとしていた。

もう、時間も八時を回っていた。帰ってご飯の支度をしなくてはいけない…。

だんだんと現実の生活の中に戻ってゆく。

それからの一週間を何気なく暮らした。

もちろん仕事も家事も完璧にこなし、充実していた。

だが、心にぽつりと空いた穴があった。そう、何か物足りなかった。仕事場でも、家庭でも…。

それは、片思いしていた頃の感情とは違う。

だって、寂しくないし、悲しくもない。

ただ、何か足りなかった。

それは輝きだろうか…。ずっと無くしていたことに気づかなかった、心の輝きなんじゃないだろうか？

「京子、どうしたんだ？ボーとして…。俺が仕事に行ってしまうのが寂しかったりして」

「な、何を言ってるの。さあ、いつてらっしゃい」

土曜日の朝は、克巳だけが働きに行く。

彼は中高校生の頃、遊んでばかりだったから、大企業には就職できず、中小企業の労働者として働いていた。工事現場が変わる度、生活のリズムも変わる。遠い現場なら、朝も早く出かけなければならぬ。毎日泥だらけになって働いている。

疲れる、疲れると言いながらも、働きに行く彼を私は感心して見つめていた。

昔の彼なら、地味でしんどいことはしなかっただろう。

中学を卒業するとき克巳に、やくざから誘いがあった。楽ができるからと言って、彼もその道に進もうとしていた。今では、彼の友達も何人かは、暴力団とかやくざとか呼ばれる組織の幹部になりつつある。

けれど、彼がそうならなかったのは、私の存在が大きかったと、彼は言ったことがある。

私のために、まじめに働いてくれる彼を好きだった。

安心できる彼を心から好きだった。

なのになぜ？なぜ私は先輩を忘れることが出来ないの？こうしていても、会いたくて、会いたくて…心が張り裂けそうになる。

会わなければ良かった？いいえ、そんなことは決して思わない。

…姿を見たい。

私は会いに行こうとしている。姿を見ようとしている。

わかってる。昔には戻れないことを。

今は、克巳の妻であることを。

けれど、気持ちだけが、時間をさかのぼってゆく。

あの青春時代に帰ってゆく。

克巳…私を止めて。私をずっと縛り付けていて。この身が勝手に動き出さないように。この心が騒ぎださないように…ずっとそばにいて。

そう頭で考えても、私は行くだろう。今週も先輩に会いに行くだろう。

ただ、会いたい。

「母さん…」

私は、会いたい気持ちを抑えるために実家に帰った。

実家に帰ると、気分が落ちつく。

甘えさせてくれる人がいるという事が、どれ程心地よいものか離れてみて初めて気付いた。

ただ、純粹に私を甘やかしてくれる。ただ、私の幸せを考えてくれる母。

克巳とは違う、何とも言えない優しさが伝わる。心地よい安堵感。母の中でずっと暮らしたい。母に守られて、生きて行きたい。

悲しいことがあると、母の胸の中で思いきり泣いていた。

あの頃に帰りたい。

もう、母の胸に泣きつくことは出来ない。今では、母の幸せを私も考えているから…。

母の幸せは、きっと私が幸せになること。

だから、泣き顔なんか見せることは出来ない。小さい頃のように泣きじゃくることは出来ない。

あの頃に帰りたい…。

最近よく思う言葉だということに気がついた。

幸せな時間だったからこそ、帰りたいと思うのだ。今は？

今は、数年後になって帰りたいと思えるような時を過ごしているだろうか？

子供の頃に帰りたい。中学、高校生時代に帰りたい。

今は幸せなんかじゃないんだろうか…。

高校生時代には子供の頃に帰りたいと思っていた。

やはり、いつの日か今の時が幸せに思える日が来るのだろうか…。今という時に不安を感じたが、母の前でそんな素振りは見せることは出来なかった。

「京子、どうしたんだい、突然帰ってきて」

「うん、何となく暇になったからさ…」

「そんなこと言って、部屋の掃除は終わったの？まだ、お昼前よ？」

「お昼御飯でも一緒に食べようと思って！」

「お昼御飯食べたら、掃除しに帰るのよ、向こうの義母さんに悪いわ」

何かと克巳のお母さんに気を使う母。

「うん、来週は向こうのお母さんと食べるから気にしないで…」

そう断って、私たちは昼食についた。

二〇年間慣れた食卓で、母と二人きりで食事した。

「京子：幸せかい？」

「何よ、突然？」

不意に話しかけてきた母に戸惑った。

「うん？京子が幸せならいいなあと思って。京子は母さんに似てるから、心配なんだよね」

優しい微笑みを私に向けて話し続けた。

「母さんね、思いこんだらとことんだからさあ、好きな人が出来たら、まわりが見えなくなつて、何でもしてしまうところがあるの。それで苦労したんだ」

「知ってる、父さんに尽くしすぎるほど尽くして来たもんねえ」

「うん、ちよつと疲れちゃつた。京子の幸せを犠牲にしてまで父さんに尽くしてきたような気がしてねえ」

「母さん…」

小さい頃よく見た夢があつた。

父さんと、二人で遊んでたら、白い不気味な笑い顔の仮面をかぶつた女の人が、父さんを自転車に乗せて父さんを連れて行く。私は、母さんを捜して叫んでも、誰も来なくて…仮面の女の人を追いかけた。その女の人が私を見て仮面をはずすと、母さんだった。そして私を置いて、母さんは父さんだけを連れて消えていった。

孤独感。

夢の出来事とはいえ、幼い子供の頃には、耐えられない孤独感が私を襲つていた。

それ程、私は母の愛に飢えていた。

父ばかりを見ている母が恋しかった。父のわがままで苦労する母に、見つめて貰いたかった。

今、やっと母が私を見てくれている。

母さんが私のことを考えてくれる。

「母さん」

もう一度母の名を呼んだ。

「母さん、私は幸せだよ。何があつても後悔しないように一生懸命生きているよ。もし、私が行方不明になつたり、何かで死んじやつたりしても、きつと幸せだと思う。母さんだつて、なんだかんだ言つても後悔はしていないでしょう？」

「うん、そうだね、母さんも幸せだったよねえ」

その言葉で、私は目頭が熱くなつた。

母さんからその言葉が聞けて良かった。

私もきつと幸せになれる様な気がした。母さんのように、きつと幸せに…。

人からどんなに不幸に見えても、自分が幸せだったらいい。

母さんの一生は、私から見て幸せだったとは思えない。けれど、母さんは幸せだと言った。

その時は、ただ一生懸命で何も見えなくても、幸せだったと思える、帰りたいと思える時を過ごしたい。

会いにいこう。後悔のないように。好きな人に会いに行こう…。

桜の咲き乱れる墓地。

惜しげもなく散る花びらが、潔くて美しく見えた。

街を見下ろすように立ち並ぶ墓を通り過ぎ、元山家と書かれた墓前で、私は静かに立ち止まった。

「雪枝…久しぶりだね」

雪枝が逝ってから、六年近くの歳月が過ぎていた。

雪枝が逝ったのも、まだ寒さの残る春だった。

幸せだったと思えた？死の瞬間に幸せだったと感じた？

高校一年の時を共にして、留年が決まったとき、あなたは悔しがつていたね…。学校をやめて…働くって言ってたよね。自由にしてたから、しんどかったでしょう？先生達を敵にして…自由を守り通して…苦しかったでしょう？みんながあなたを頼ってばかりで…本当は疲れたでしょう…？

そんな素振りも見せないで、私を励ましてくれたよね…。

でも、どうして最後に逃げてしまったの？

どうして、シンナーなんか…。

死にたかったの？むちゃな吸い方をして…もう疲れてしまってたの？

どれ程、私があなたに憧れていたか…どれ程、あなたを好きだったか…。

自由に生きるということを、あなたはみんなに見せてくれた。

無理をしていたんじゃない？本当は苦しかったんだ。

死んで楽になれた？戦うことが無くなって、守る自由が無くなって楽になれた？愛を知らないまま…人に頼ることを知らないまま…あなたは逝ってしまった。

それは私に悲しみを与えた。

私は最後まで戦って、あの頃は楽しかったね…と言って欲しかった。

もう、私はあなたに頼らない。私があなたに頼って、あなたの自由が私のものだと感じていた。

今度は、自分の力で頑張る。

自由に、そして自分に正直になる。

だから、見ていて。

「私は強くなる」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2091d/>

---

思い出に未来を求めて

2010年12月8日10時59分発行